

都市度とネットワークから見た子育て

I 家族をめぐる変化

今日、家族をめぐる話題は多い。出生率低下の問題は、政府や厚生労働省のみならず、産業界はじめ、人々の大きな関心事となっている。また介護のあり方も2000年の介護保険制度発足以来、介護の現場である家族の場面にも大きな変化をもたらした。このように家族の中の出来事は、家族員だけの問題ではなく、家族を取り巻く地域や行政、さらには制度の問題として人々の関心を集めている。

その中で子育てのあり方もまた、家族員だけでなく、地域・行政・制度の問題として再認識されようとしている。若年人口の晩婚化・非婚化傾向に加え、女性の社会進出や教育費負担などの変化は、従来までの価値や役割を前提とした制度が現状と齟齬をきたす状況をもたらすようになってきている。「産みたくても、産めない」(注1)「産んでも、子育てが大変」という今日の子育ての現場は一体どのようなものなのだろうか。

本稿では、都市度(都心からの距離)とパーソナル・ネットワーク(人それぞれの持つ付き合い、関係資源)という二つの視点から、郊外と村落の母親がどのような関係資源を動員して子育てをしているのかを明らかにする。果たして、郊外と村落の子育ては性質の異なるものなのであろうか。違ふとすれば、どのような子育ての問題がそれぞれあるのだろうか。以下、調査データから検討したい。

(注1) 国立社会保障・人口問題研究所「第13回



立山 徳子 (たてやま のりこ)

(関東学院大学人間環境学部准教授)

略歴

- 1963 東京生まれ
- 1986 上智大学文学部哲学科卒業(文学学士)
- 1991 上智大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程修了(文学修士)
- 1997 東京都立大学大学院社会科学部社会学専攻博士課程、単位取得退学
明治学院大学社会学部附属研究所にて客員研究員、城西国際大学福祉総合学部専任講師を経て、
- 2007 関東学院大学人間環境学部人間環境デザイン学科に准教授として着任

専攻

都市社会学、家族社会学、郊外社会学論、パーソナル・ネットワーク論

主な著書

- 『「家族」はどこへいく』(共著、青弓社、2007年)
- 『新編 東京圏の社会地図 1975-90』(共著、東京大学出版会、2004年)
- 『リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本—』(共訳、勁草書房、2006年)

出生動向基本調査(2005)」によれば、平均理想子供数は2.48人だが、平均予定子供数は2.11人である。

II 社会地図から見た家族

はじめに二つの地図をご覧ください。いずれも東京駅を中心とした首都圏 60km 圏内の地図である。一般的な地図は交通網や等高線といったものが記載情報になるが、ここに示したものはそれとは異なり、社会生活を示す指標を地図表現したものである。図表 1 は核家族世帯比率（核家族世帯数/一般世帯総数×100）、図表 2 はその他の親族世帯比率（核家族、単身世帯以外のその他の親族世帯数/一般世帯総数×100）を、各自治体別データで算出し、比率の高低が濃淡で表現されたものである。

ここから読み取れることは、首都圏中心からおよそ 20～50km 圏の幅広いゾーンには、核家族世帯比率が高く（図表 1）、一方 50～60km 圏にはその他の親族世帯、つまり三・四世代世帯比率が高いということである（図表 2）。（ちなみに、都心部では単身世帯比率が高い

が、図表省略）。言い換えると、世帯構成の分布は同心円上に分布しており、いわゆる郊外に核家族世帯、村落に三・四世代世帯が多いという分布パターンがあることになる（注 2）。

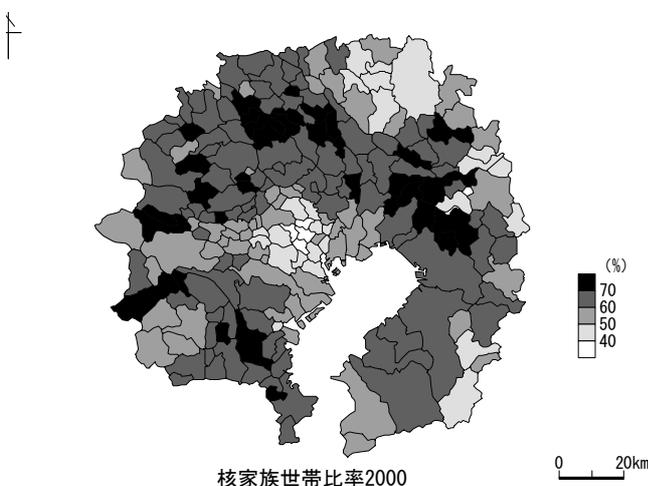
家族生活には都市度（都心からの距離）と関連を持った集住傾向がある。とりわけ、郊外の居住者にとって“うちの周りはどこも核家族”という現実、後に見る子育ての現場において大きな意味を持つ。

（注 2）社会地図からみた家族生活の詳細な分析は、以下をご参考願いたい。

立山徳子(2004)「家族からみた東京圏」、倉沢進・浅川達人編『新編 東京圏の社会地図—1975-90』東京大学出版会、pp73-97

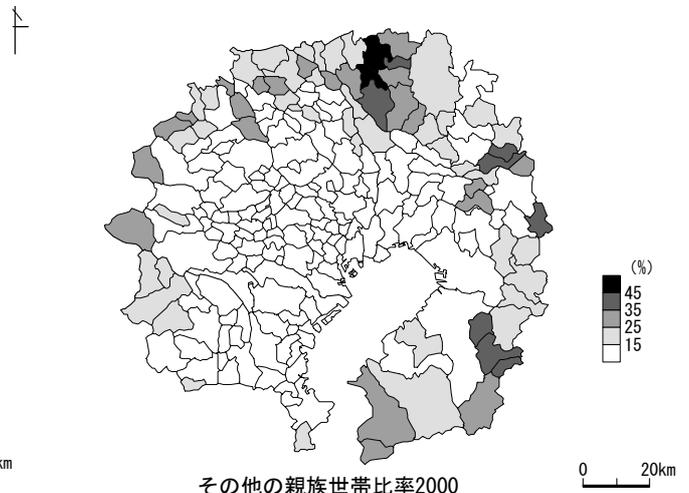
立山徳子(2005)「首都圏都市空間における「近代家族」の在り処—1975-2000 年国勢調査データに見る家族変動」、家計経済研究所編『季刊家計経済研究』第 66 号、家計経済研究所、pp21-31

図表 1 核家族世帯比率



注) 国勢調査データより筆者作成。
核家族世帯比率=核家族世帯数/一般世帯数×100

図表 2 その他の親族世帯比率



注) 国勢調査データより筆者作成。
その他の親族世帯比率=核家族、単身世帯以外のその他の親族世帯数/一般世帯数×100

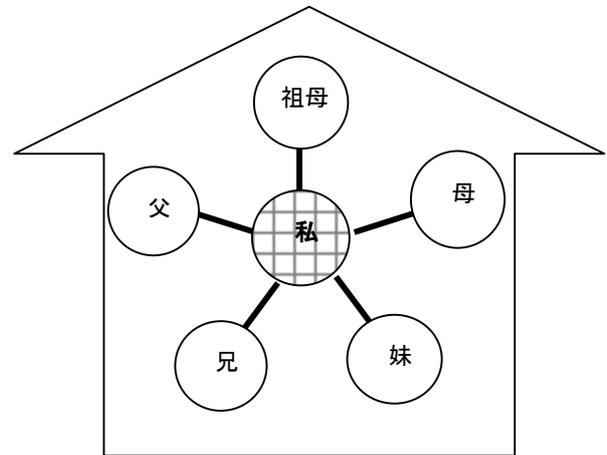
Ⅲ ネットワークから見た家族

さて都市度のほかに家族生活の考察の上で、もうひとつ注目したいのがパーソナル・ネットワークという視点である。人は親族、近隣、同僚、友人といった様々な付き合いを持っているが、こうしたお付き合い関係・関係資源のことを社会学ではパーソナル・ネットワークと呼んでいる。そして家族にパーソナル・ネットワークという考え方を当てはめた場合、家族を一塊で自明の存在としてではなく、人と人との集合体として捉えなおすことができる。ここでは「ネットワークとしての家族(図表3)」と「ネットワークの中の家族(図表4)」という捉え方を述べよう。

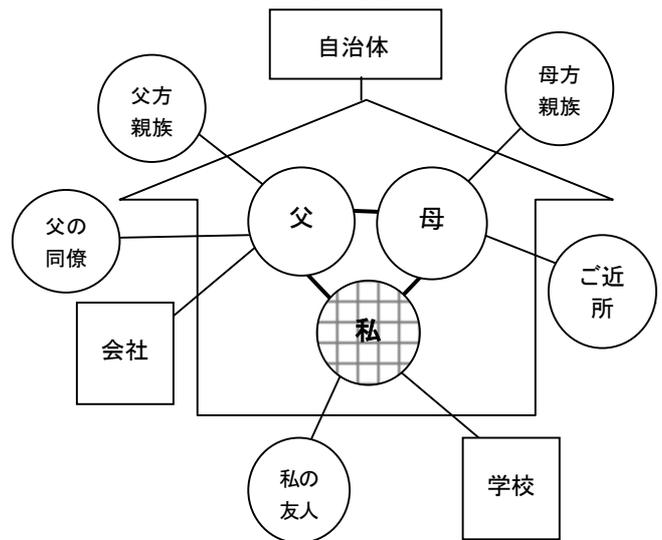
図表3は“私”から見た同居家族の状態である。この図の場合、祖母と両親、きょうだいを含んだ6人の三世代同居家族で、“私”は多くの家族に助言やサポートを受けられる状態が予想できる。逆に核家族や単身世帯のように家族メンバーが少なければ(いなければ)、“私”が得られる助言やサポートは少なくなるだろう。“私”が何人の、そしてどのような家族と同居しているかは、家族の中でサポート資源が多いか少ないかに直結する問題となる。この家族の中の関係資源を「世帯内ネットワーク」と呼ぶことにする。

一方、図表4は家族の外側のネットワークに注目したものである。家族を構成するメンバーは個々に様々なネットワークを持っている。この場合、ネットワークの内容は人ばかりではなく、学校・会社・自治体といった機

図表3 ネットワークとしての家族



図表4 ネットワーク中の家族



注) 図表3・図表4ともに、立山徳子「都市・家族・ネットワーク」、p134-p135より(沢山美果子・岩上真珠・立山徳子・他著(2007)『「家族」はどこへいく』青弓社)

関も含まれる。例えば、父親には“同僚”や“会社”との個人的な関係もあるが、“父方親族”のように父親以外の家族メンバーにとっても関係が共有されているネットワークもある。このように家族は家族の外側に様々なネットワークを保有しているとイメージすることができる。ここではこれを「世帯外ネット

ワーク」と呼ぶことにしよう。

家族がどのような世帯外ネットワークに囲まれているのかは、家族構成員ひとりひとりがどれだけネットワークを開拓し、維持しているかという個人の力量による問題であると思われるかもしれない。だが社会学が明らかにしてきたのは、そうした個人的性格よりもむしろ社会的性格（学歴、職業、出身地など）が人々の持つネットワークのあり方と強く関連しているという事実である（注3）。先に見た居住地の都市度もそのひとつである。

人がどのような場所に住んでいるのかということと、その人のネットワークのもち方と

は関連を持っているのだ。以下、郊外・村落の居住者データから世帯内・世帯外ネットワークの違いに注目し、子育ての現状を見てゆくことにしよう。

（注3）ネットワーク論の代表的なものとして、以下、ご参考願いたい。

フィッシャー、C.S./松本康・前田尚子（訳）（2003）『友人のあいだで暮らすー北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』未来社
野沢慎司（編・監訳）（2006）『リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房

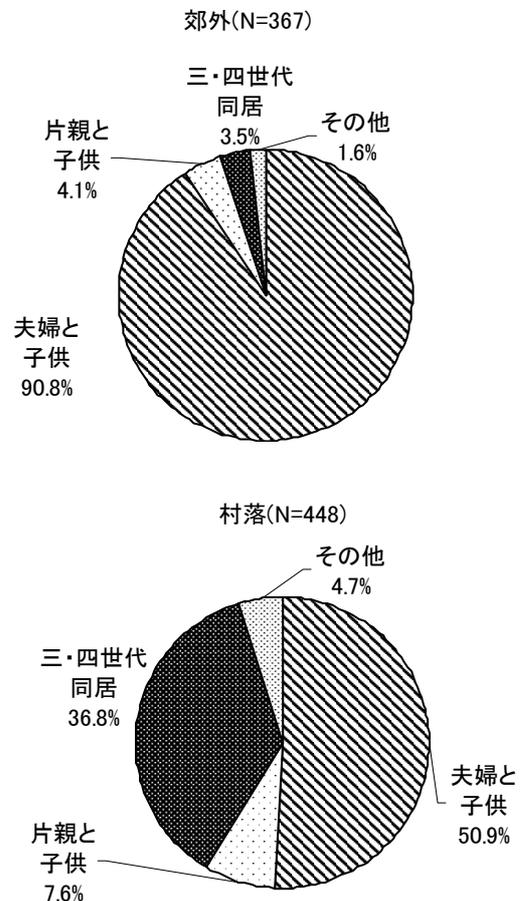
IV 郊外の子育て、村落の子育て

1 世帯内ネットワーク

郊外と村落の子育ての現状を概観するにあたり、3～5歳の幼児を持つ母親を対象とした調査データから、それぞれの家族の世帯内・世帯外ネットワークを示してゆこう（注4）。

図表5は調査対象者の居住地別に、それぞれの家族の世帯構成を示したものである。先に図表1・2でも確認されたように、郊外家族は圧倒的に核家族世帯が多いのが特徴であるのに対し、村落家族は核家族世帯が半数を占めつつも、三・四世代世帯がかなりの割合を占めていることがわかる。これを端的に言えば、郊外家族の世帯内ネットワークには祖父母が含まれていないのに対し、村落家族は多くの場合、祖父母という関係資源が含まれる傾向にあることを意味する。

図表5 郊外と村落の世帯構成



次に夫という関係資源について確認しよう。母子家庭を除いた夫のいる世帯のみを対象に、夫の週労働時間（図表6）、夫の通勤時間（図表7）、夫の帰宅時間（図表8）、夫が子供と遊ぶ頻度（図表9）をたずね、それぞれ郊外・村落別にクロス集計した。夫たちがどのような生活時間を体験しているのかを明らかにすることで、彼らが幼児を持つ母親にとって有効な関係資源であるかを考察しよう。

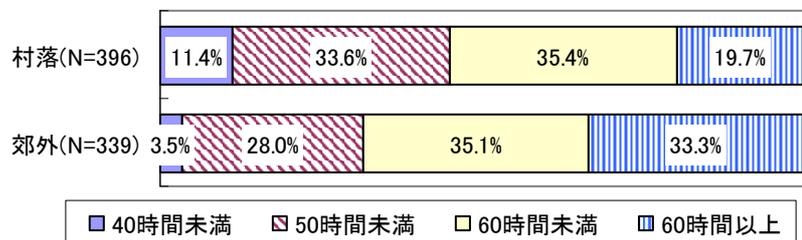
その結果、データから浮かびあがってきたのは、村落家族の夫に比べ郊外家族の夫は週労働時間・通勤時間ともに長く、そのため帰宅する時間も遅い傾向にあるという生活スタイルであることがわかった。郊外の夫たちが膨大な労働時間を割いている背景には、彼らの職業生活の多くが、自宅から距離のある都心オフィスに通勤するサラリーマンであることに起因する。こうした労働中心の生活の中では、結果的に子供と接触する時間には限界が生じてしまう（図表9）（注5）。

夫たちは確かに家族の一員として存在する。だが、その存在は生活時間という観点から見たときに全く違った意味を放つ。データを見る限り、郊外の夫たちは幼児を抱える

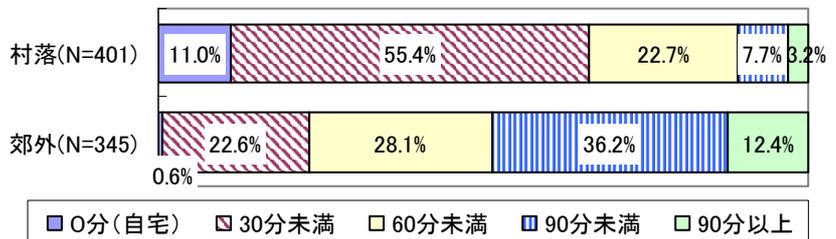
母親にとっては、“いるけど、いないも同然”の存在であり、彼女たちが“うちは母子家庭と同じ”と言わざるを得ない状況にあることが理解できる。

世帯構成と夫の生活時間から見る限り、郊外の母親たちにとっての世帯内ネットワークは、頼れる祖父母のいない核家族の中で、頼みの夫も不在がちという極めて心もとない状

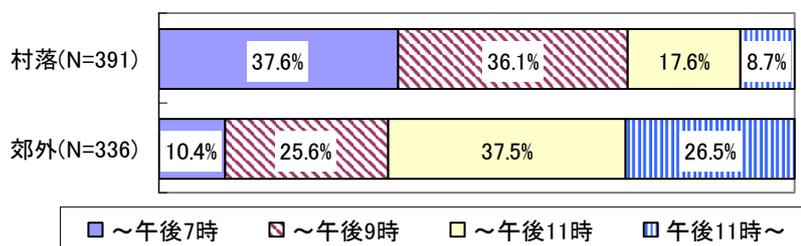
図表6 都市度×夫の週労働時間（カイニ乗検定、0.1%水準有意）



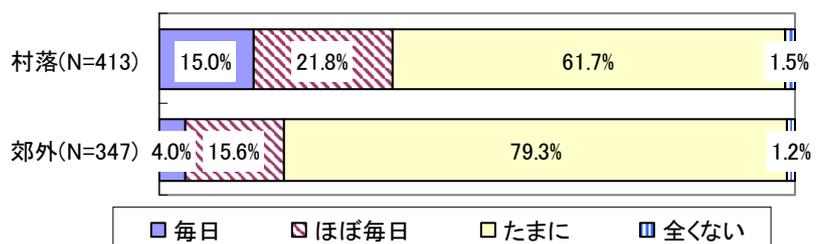
図表7 都市度×夫の通勤時間（カイニ乗検定、0.1%水準有意）



図表8 都市度と夫の帰宅時間（カイニ乗検定、0.1%水準有意）



図表9 都市度×子どもとの遊び（夫）（カイニ乗検定、0.1%水準有意）



況にある。

(注4) ここでは筆者が2006年9月に実施した「乳幼児を持つ母親の子育てスタイルとパーソナル・ネットワークに関する調査」(明治学院大学社会調査実習)データを用いる。調査対象者は都市度の異なる千葉県内2地点(千葉市、山武郡)の幼稚園・保育園に3~5歳の幼児を預ける母親である。各幼稚園・保育所への調査協力には、千葉県総合企画部男女共同参画課、千葉市学事課、千葉市保育課ならびに山武郡横芝町福祉課・同郡芝山町福祉保健課のご協力をいただいた。その結果、千葉市の4保育所・2幼稚園、山武郡の7保育所・2幼稚園にご協力い

ただけた。記して、感謝申し上げたい。

標本数は、①千葉市保育所283人、②千葉市幼稚園290人、③山武郡保育所278人、④山武郡幼稚園275人の計1,126人である。調査方法は、調査票郵送自記式・各園での一括回収によるものである。有効回収票数は823票、回収率は73.1%であった。

(注5) 夫と子供との接触については、このほかに「子供と食事をする」「子供の送り迎え」「子供とテレビを見る」「子供とお風呂に入る」「子供と寝る」といった項目もたずねたが、いずれも郊外家族の夫の頻度は村落家族の夫に比べて低いものであった。

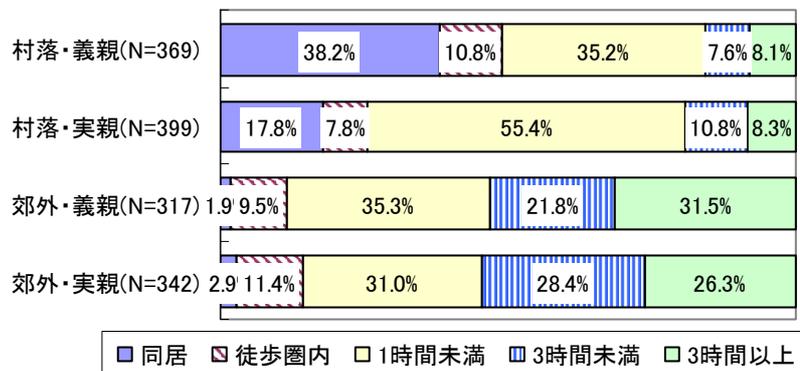
2 世帯外ネットワーク

次に世帯外のネットワークについて検討しよう。世帯外ネットワークには、親族・近隣・同僚・友人が挙げられるが、そのほかに幼児の子育てをする上で最も頼りにされがちな実親と義理親について検討しよう。実親・義理親の居住地を時間距離別にたずねた結果から、親へのアクセスの違いをみてみよう(図表10)。

先に確認したように村落家族には三・四世代世帯が多かったので、図表10の中でも親との同居を示す比率は高い。ただ実親との同居よりも、むしろ夫方の義理親との同居傾向が強い。同居以外に注目すると、村落の母親にとっては実親も義理親も8割が1時間未満の場所に居住していることがわかる。村落の母親にとって、親という関係資源はいざというときアクセス可能な頼れる存在と言えよう。一方、郊外の母親の場合はどうだろう。核家族が圧倒的に多

い郊外家族にとって、親は世帯の外側の存在である。では親たちはどこに居住しているのだろうか。図表から明らかになるのは、郊外の母親たちにとって実親も義理親もほぼ半数は1時間以上かかる遠方に居住している存在であるということだ。とりわけ親と会うまでに「3時間以上」かかるという比率の高さが目に付く。郊外の母親たちの多くは実親も義理親も遠方に居住し、たまにしか会うことのない存在なのだ。この事実は郊外の母親たちにとって、親に日常的な子育ての援助を期待

図表10 都市度×親の居住地



注) 実親、義親ともにカイ二乗検定は0.1%水準有意。

できないことを意味する。

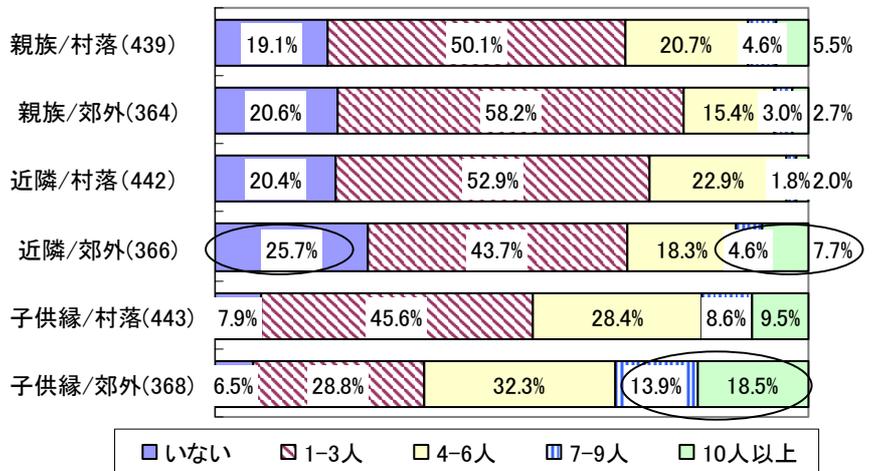
ここまでで明らかになったのは、村落の母親に比べ、郊外の母親が世帯内にも世帯外の親にも子育てを支えてもらう体制が極めて乏しいという事実である。結果的に郊外の母親は一人で子育ての負担を抱えることになっているという構図が見えてくる。この状況に対して親以外の世帯外ネットワークは何らかの支えになっているのだろうか。

次に図表 11 は都市度別に母親たちが日頃親しく付き合っている世帯外ネットワークを親族・近隣・子供縁（子供を通じた付き合い）のそれぞれについて数をたずねた結果である。確認しよう。まず、親族は比較的弱い関連しか示さなかったが、郊外の母親のほうが親しい親族数が少ない傾向と言えよう。

近隣と子供縁については、都市度とネットワーク数との間に強い関連性が認められた。まず近隣の場合、郊外の母親のほうが親しい近隣が「いない」と回答する傾向が多いものの、反面、「7-9人」「10人以上」と多くの近隣ネットワークとの交友関係を持つのも、郊外の母親のほうが多かった。子供縁の場合もやはり「7-9人」「10人以上」という豊かな交友関係をもつ母親が村落よりも郊外に非常に多い。郊外の母親にとって、こうした豊かな近隣・子供縁ネットワークは何を意味するのだろうか。

続いて各ネットワークのもつサポート性と

図表 11 都市度×世帯外ネットワーク

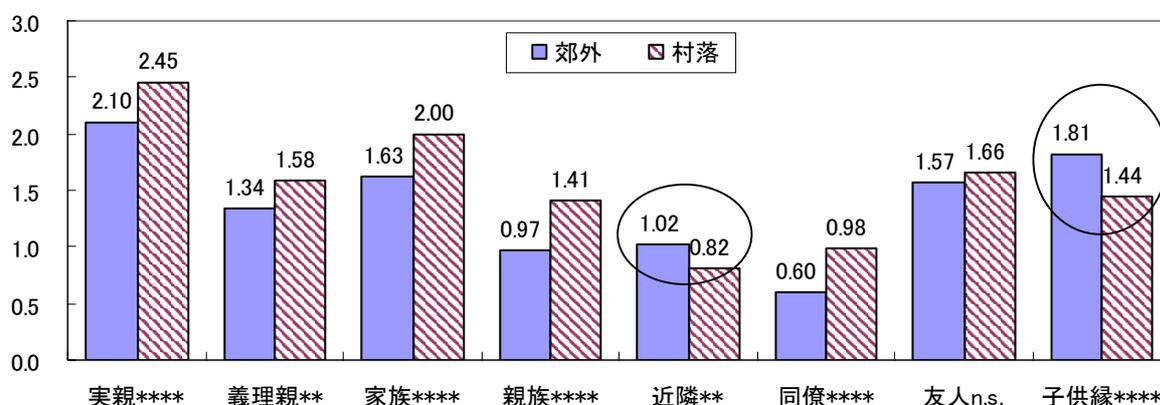


注) カイ二乗検定結果は、親族が 5%水準、近隣が 0.1%水準、子供縁が 0.1%水準の有意。

いう点から検討しよう。図表 12 は都市度別にネットワークのサポート得点を比較した結果である。これによると、友人以外のネットワークで都市度によるサポート性の違いが見られる。さらに個々のネットワーク得点の傾向を見ると、ほとんどの場合、郊外よりも村落の母親のほうが各ネットワークからのサポートを多く受け取っていることがわかる。だがその傾向には例外もある。近隣と子供縁からのサポート得点だけは、逆の傾向、つまり村落よりも郊外の母親のほうが多くのサポートを得ているのだ(注6)。

郊外の母親にとって、近隣と子供縁のみが村落の母親より豊かなネットワークとして保有されているという事実が浮かびあがってきた。幼児を抱え、少なからず移動や接触機会の制約の多い母親たちにとって、唯一、居住地を媒介するという最もコストがかからない状況の中で、なんとか自ら開拓し、選別し、さらには関係を維持することによって文字通り編み上げられるネットワークが、豊かな近隣と

図表 12 都市度×ネットワークサポート



注1) 各サポート得点に対する一元配置分散分析の結果。サポート得点は「悩みを聞いてくれる人」「簡単な用事を頼める人」「看病を頼めるひと」の3項目について個々の関係ごとに該当する場合に1点を与え、足し合わせたもの。

注2) *は5%、**は1%、***は0.1%、****は0.01%水準で、郊外と村落の間にサポート得点の差が有意であることを示す。

子供縁となって結実していることを意味するだろう。これを裏返せば、夫も親にも頼れない郊外の母親たちにとって、近隣・子供縁以外、他に頼る人がいない状態があるとも言える。

(注6) 従来のネットワーク研究では、都市度が高いほど(村落よりも郊外のほうが)近隣ネ

ットワークの量やサポートが少なくなる傾向があると言われてきており、国内外の調査データもそれを実証してきた。だが、図表12で確認できるのは、従来の説とは全く逆の現象である。これはおそらく、調査対象者を育児期の母親だけに限定したことに大きく起因している結果と思われる。

3 子育てとネットワーク

ここまで郊外・村落の母親たちの世帯内・世帯外ネットワークを確認してきた。それぞれに異なるネットワーク環境の中にあることで、母親たちの子育ての実態には違いが見られるのだろうか。またもし違いがあるとすれば、母親たちの子育ての違いは、そのネットワークとどのような関連を持っているのだろうか。

調査データでは母親たちに子供の世話をしている者、子育ての担い手をたずねている(複数回答)。図表13にその結果をまとめた。まず母親本人が子育ての担い手であると自認している割合が極めて高いこと、またそれには

郊外・村落の都市度の差は見られない。一方、夫を子育ての担い手と見る母親は郊外・村落ともに半数弱である。子育ての担い手が都市度にかかわらず、母親・父親の間でアンバランスな状態と認識されているようだ。

その他のネットワークに目をむけると、実親・義理親については村落の母親のほうが担い手と認知する傾向が強い。すでに見てきたとおり、村落の母親にとって同居ないしは近居傾向の強い実親や義理親は子育て担い手として一定程度、活用されていると言える。

だが、実親・義理親よりもはるかに高く担い

手と認識されているのが、子供縁と保育・幼稚園である。ただし図をよく見ると、両者の傾向は全く異なる。保育・幼稚園は村落の母親のほうが担い手として認知する傾向が強いのに、子供縁については村落より郊外の母親のほうが担い手として認知する傾向が強い。図表 13 全体を見ると、郊外の母親にとって子供縁は唯一、村落の母親よりも子育ての担い手として高く認知しているものである。夫にも親にも頼れない郊外の母親が、子供縁を活用することで子育てをこなしている実態が読み取れる。

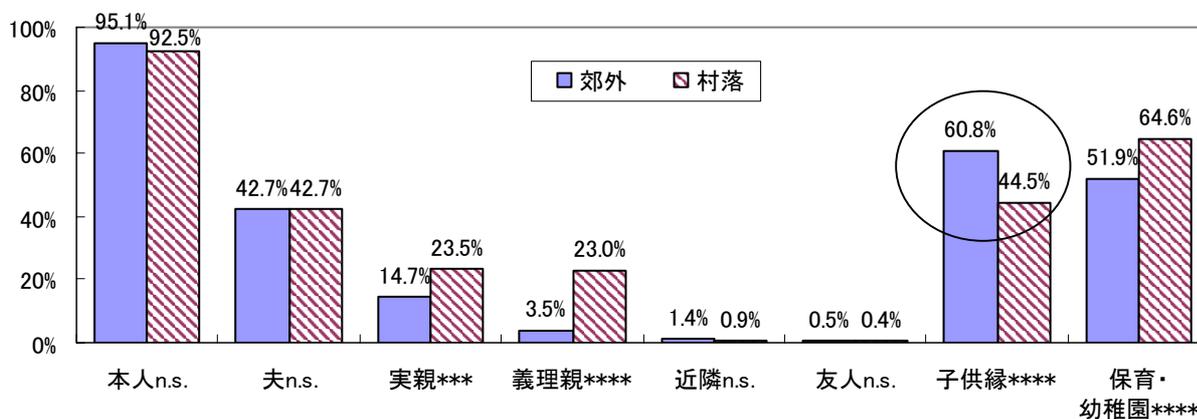
ここまでの考察で、村落・郊外それぞれの母親は異なるネットワーク環境の中で異なる子育てスタイルをもっていると言えそうだ。要約すれば、村落の母親は夫や親のほかに、保

育・幼稚園といった子育てサービスも活用した幅広いネットワークに支えられて子育てをしている。これに対し郊外の母親の場合、夫や親からのサポートも乏しく、また村落に比べれば人口規模の大きな郊外では十分な子育てサービスも得にくい状況にある。こうした脆弱なネットワーク環境の中で、郊外の母親たちは自ら開拓した子供縁に頼ることになる。

「公園デビュー」が郊外の母子にとって“生きるか死ぬか”の大問題であり、子供縁を得られる公園が、郊外というネットワーク砂漠で命の水を得られるオアシスとして描かれるまでの背景がここにあるだろう。(注7)

(注7) 本山ちさと(1995)『公園デビュー - 母たちのオキテ』DHC(学陽文庫 1998)

図表 13 都市度×子育て担い手



注) 「あなたのお子さんの世話をなさっているのは主にどなたですか」の質問に対し、それぞれ選択された比率を表した。ただし、子供縁のみは「子供の悩みを相談する方はどなたですか」の問いへの回答。カイ二乗検定結果で、***は0.1%、****は0.01%水準で、郊外と村落の間の差が有意にあることを示す。

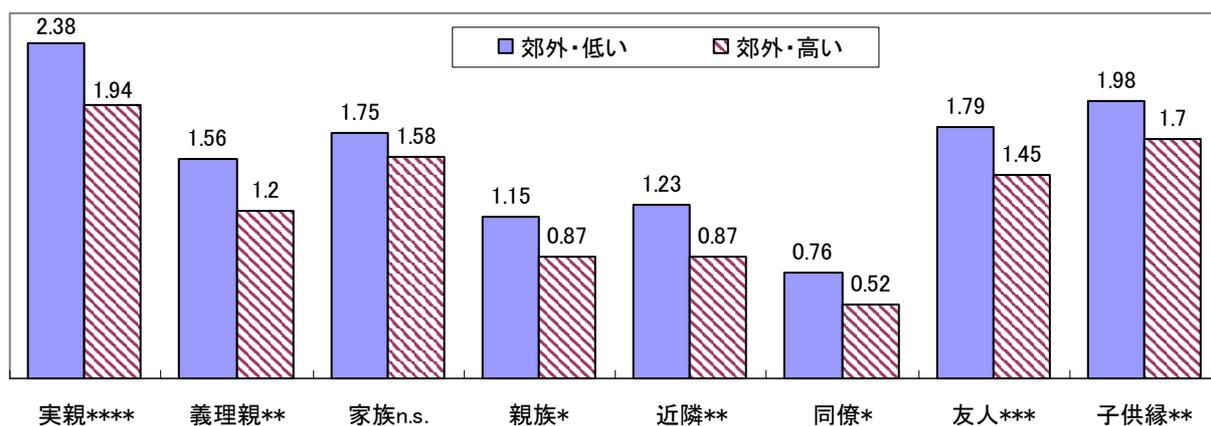
4 育児不安とネットワーク

次に母親たちの育児不安とネットワークの関連をみてみよう。育児不安に関する質問（育児不安尺度）から調査対象者を育児不安の高い者と低い者とにグループ分けした。図表 14 は郊外のみ、図表 15 は村落のみの対象者に限った場合、図表 16 は都市度（郊外・村落）と育児不安（高い・低い）の組み合わせから、調査対象者を 4 グループに分けてそれぞれのネットワークからのサポート得点を見たもの

である。

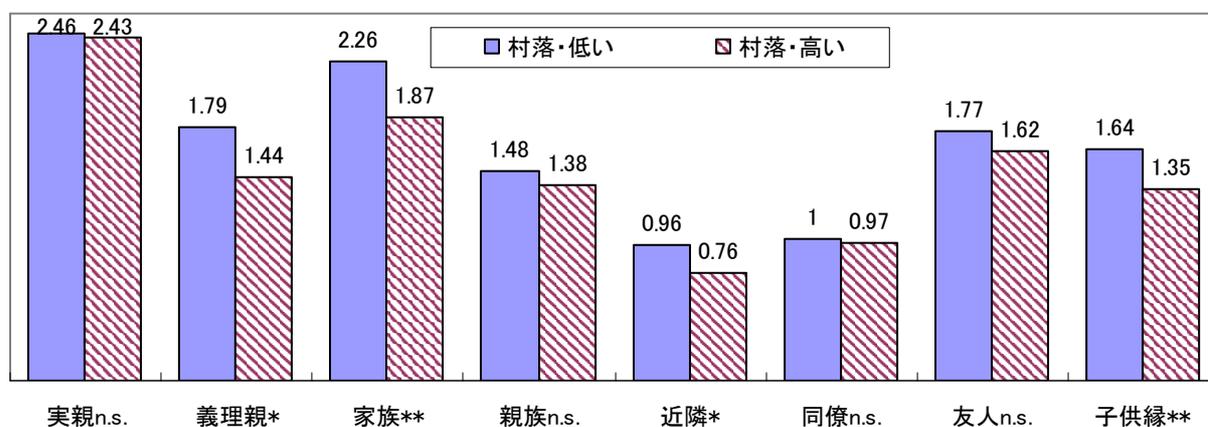
まず図表 14、図表 15 について確認すると、郊外・村落いずれの場合も育児不安の高い者より低い者のほうが多くのサポートをいずれのネットワークからも得られていることがわかる。ネットワークからのサポート量と育児不安度との間に強い関連性があるのだ。続けて図表 16 を見てみよう。ここでは母親たちを都市度と育児不安度から 4 グループに分ける

図表 14 育児不安×サポート得点（郊外のみ）



注) *は5%、**は1%、***は0.1%、****は0.01%水準で、グループ間にサポート得点差が有意であることを示す。

図表 15 育児不安×サポート得点（村落のみ）



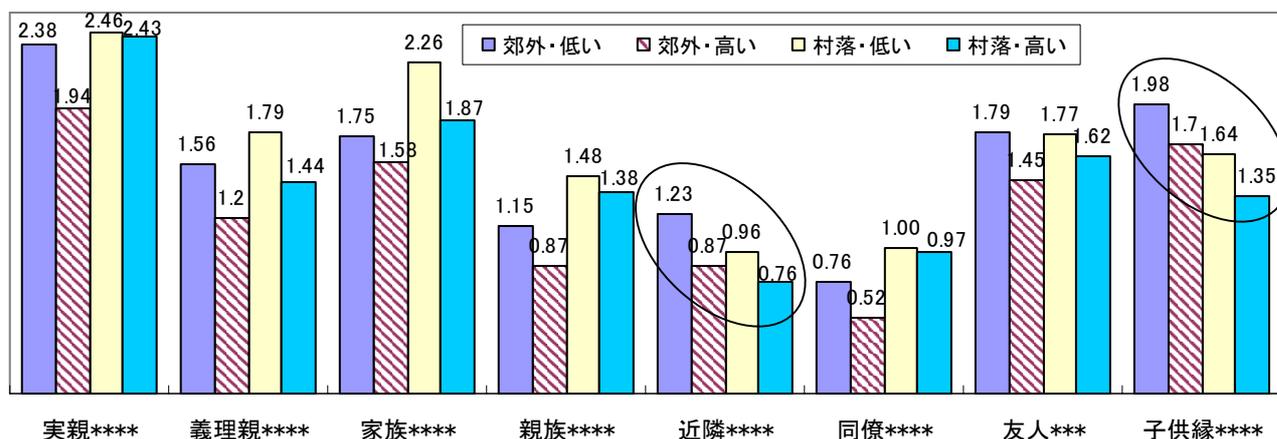
注) *は5%、**は1%、***は0.1%、****は0.01%水準で、グループ間にサポート得点差が有意であることを示す。

ことにより、各々とサポート得点との関連を確認できる。4つのグループを同時に表記したことでわかるのは、多くの場合、不安度の高い者より低い者、さらには郊外より村落のほうがサポート得点の高い傾向にあるということだ。だがそうした中でも近隣や子供縁については、先の図表12でも確認できたように村落より郊外の母親のほうがサポート得点は高く、特に郊外母親の育児不安の低い者が多くのサポートを得ている点が注目される。郊

外の母親にとって、近隣や子供縁ネットワークをもたらすサポートが村落の母親以上に育児不安を取り除く上で重要な意味を持つ関係資源であることがここからも確認できるだろう。

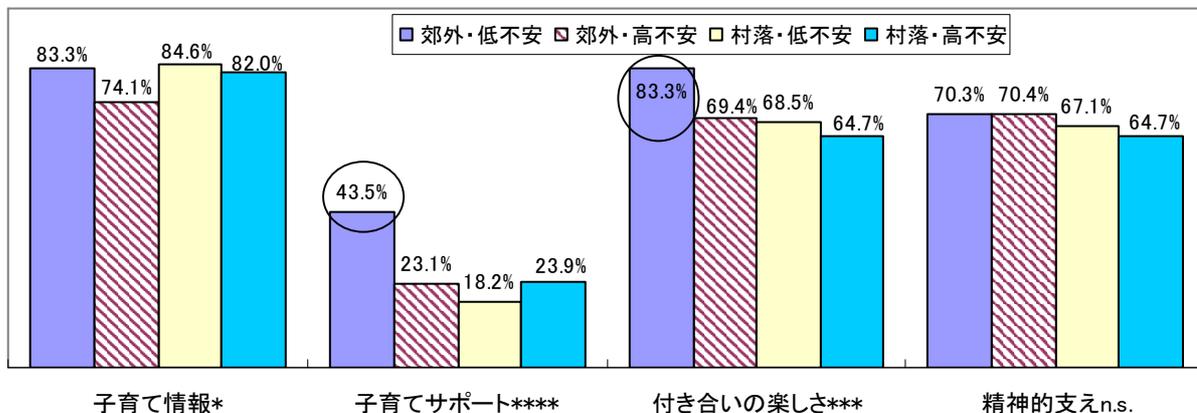
最後に、母親たちが、いわゆる“ママ友達”との付き合いにどのような期待をもって接しているのかを4グループ別に見た(図表17)。「子育て情報」「子育てサポート」「付き合いの楽しさ」「精神的支え」の4つの項目につい

図表16 都市度・育児不安×サポート得点



注) 都市度と育児不安の組み合わせによる「郊外・低い」「郊外・高い」「村落・低い」「村落・高い」の4グループの各サポート得点に対する一元配置分散分析の結果。***は0.1%、****は0.01%水準で、グループ間にサポート得点差が有意であることを示す。

図表17 都市度・不安×ママ友達への期待



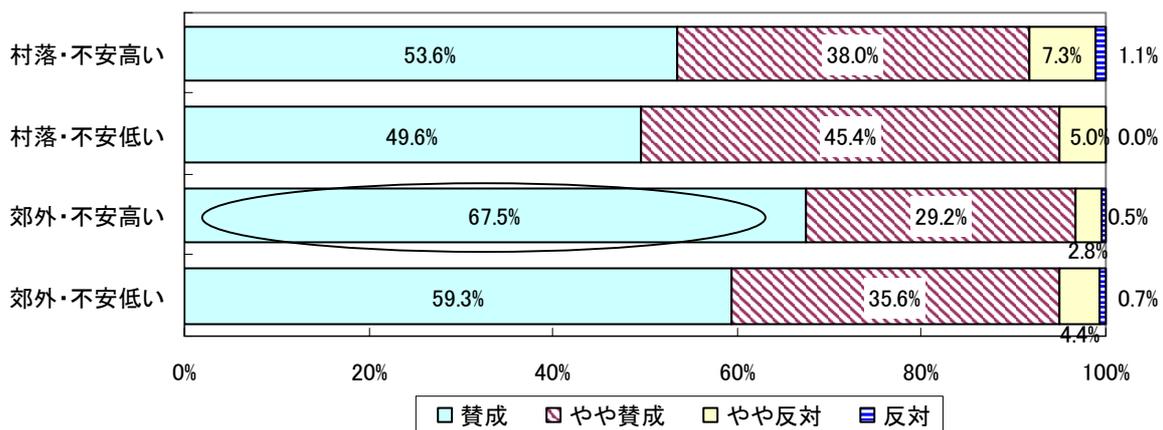
注) 都市度・育児不安によるグループそれぞれのママ友達への期待を項目別にたずねた結果。カイ二乗検定で、*は5%、***は0.1%、****は0.01%水準で、グループ間の期待差が有意であることを示す。

てたずねたところ、唯一、「精神的支え」だけは4グループ間で差が見られず、言い換えればどういった状況にある母親も7割前後がこの精神的支えをママ友達に期待しているという結果だった。一方、グループごとに差が見られたほかの3項目のうち、特に「子育てサポート」と「付き合いの楽しさ」はグループ間の差が大きく、いずれも郊外の育児不安の低い母親たちに突出した期待が見られた。言い換えれば、なにかと子育てを助け合い、付き合っていて楽しいママ友達を持っている場

合、他のネットワーク資源が乏しい郊外の母親でも育児不安を低く抑えることができているのである。

逆に育児不安の高い郊外の母親たちの場合、自分の子育て負担を解消するにも、子育ての苦楽を分かち合うにも子育て体験を共有する場や仲間を求めている。それを傍証するものとして図表18に示したように、保育所・幼稚園の必要性を最も強く望んでいるのは、郊外居住で育児不安の高い母親たちである。

図表18 都市度・不安×保育所・幼稚園の必要



注) カイ二乗検定結果は5%水準の有意差であった。

V 「家族の問題」と「社会の問題」

以上、都市度とパーソナル・ネットワークの視点から、子育てのあり方を確認してきた。ここまでの考察を整理すると、①都市度によって、家族形態に分布パターンがあること ②都市度によって、世帯内ネットワークや世帯外ネットワークには違いがあること ③村落・郊外間の比較では、郊外居住の母親に著しい世帯内ネットワークからのサポート不足が見られ、それを世帯外の近隣・子供縁ネットワー

クからのサポートで補っていること 最後に、④世帯内および世帯外ネットワークからのサポートと育児不安の間には関連が見られ、郊外居住の母親にとって近隣・子供縁ネットワークからのサポートと育児不安の間に強い関連が見られること、以上の4点が挙げられるだろう。

総じて、子育てが家族のみならず幅広いネットワークの中でおこなわれている実態が確認

できた。近年の少子化問題を受けた次世代育成の政策づくりに、家族を支えるサポート体制、すなわちセーフティ・ネットが注目される意義がここにある。

先ごろ発表された厚生労働省少子化対策特別部会の中間報告によれば、従来までの「就労と結婚・出産・子育ての二者択一構造」を解消し、両者が「車の両輪」として機能する社会モデルが提案されている。その中では①ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）と②包括的な次世代育成支援の枠組み構築が施策の二本柱と位置づけられる(注8)。

日本社会の経済成長を家族の側から見ると、次世代の再生産（出産・子育て）と労働力の再生産（稼ぎ手としての夫を会社に送り出す）というふたつの再生産活動は専業主婦という立場をとる女性の無償労働が下支えしてきたシステムとも言える。こうした家族や女性の無償労働を前提とし、含み資産としていられた時代には、企業や国家はこの二つの再生産活動維持にコストをかける必要がなかった。子育ても介護も“家族の問題”とされていたし、専業主婦の女性たちがそれらの問題に対処していた時代だった。

だが、経済の低成長期にはいった今、多くの家族にとって、女性は専業主婦でいられなくなってきている。夫のサラリーが伸び悩めば、妻たちもパートや正社員として就労する時代なのだ。それどころか、若年就労者のサラリーだけで満足な生活が見込めない現実には、親元にパラサイト（寄生）する成人子を急増させ、

晩婚化・晩産化傾向に拍車をかける結果を生んだ。年頃になれば結婚し、女性は専業主婦になって子供を産み育て、夫を仕事に送り出すというシナリオは、いまやテレビドラマの中でも見かけられない。

言い換えれば、これはかつての結婚-専業主婦-出産・育児という三位一体型の家族モデルの崩壊であり、家族を通じた次世代と労働力の再生産活動の危機を意味する。さらにはこの家族モデルを前提とすることによって、育児や介護に社会的コストをかけずにきた日本型経済モデルの見直しにつながってゆく。

家族の中の子育てが地域・企業社会の双方から協力を得る必要があることは本稿が示してきた主たる内容だが、一方、それによって初めて社会全体の持続可能性さえもが確保されるという視点が必要とされるのだ。

「家族の問題は社会の問題である」という社会的合意や共通認識の必要があるだろう。本稿が示した都市度とパーソナル・ネットワークによる検討が、子育てのニーズやサービス提供への地域差として認識され、より実態に即した議論や施策が実ることを願っている。

(注8) 社会保障審議会 第4回少子化対策特別部会資料

<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/03/dl/s0314-7d.pdf>